

聖霊降臨後第26主日（特定28） マルコ13章14—23節

〔直訳〕

14 だがとき あなたがたが見る

荒廢の憎むべきものが 立っているのを （立っては）ならないところに、

読者は 悟れ、

そのとき ユダヤの中の人々は 逃げよ 山々の中へ、

15 「だが」屋根の上の人は 降りるな また入るな

取り上げるために 何かを 彼の家の中から、

16 そして 畑の中の人は 戻るな 後ろへ

取り上げるために 彼の上着を。

17 だが不幸だ 身重の女性は そして 授乳する女性は それらの日々に。

18 だがあなたがたは祈りなさい ようにと それが起こらない 冬の間。

19 なぜならあるだろう それらの日々は

苦難は ような 起こらなかった

そのような 創造の初めから 神が造ったところの 今まで

また 決して起こらない。

20 そして もし 縮めない 主が 日々を、

救われないだろう どの 肉も。

しかし 選ばれた者たちのために 彼が選んだところの

彼は縮めた 日々を。

21 そして そのとき もし ある者が あなたがたに 言う、

「見よ ここに キリストが」、「見よ、そこに」、

あなたがたは信じるな。

22 なぜなら立ち上がるだろう 偽メシアたちが そして 偽預言者たちが

そして 与えるだろう しるしを そして 不思議なことを

惑わすために、できれば、選ばれた者たちを。

23 だがあなたがたは 見なさい。

私は前もって言った あなたがたに すべてを。

〔新共同訳〕

14 「憎むべき破壊者が立ってはならない所に立つのを見たら——読者は悟れ——、そのとき、ユダヤにいる人々は山に逃げなさい。15 屋上にいる者は下に降りてはならない。家にある物を何か取り出そうとして中に入ってはならない。16 畑にいる者は、上着を取りに帰ってはならない。17 それらの日には、身重の女と乳飲み子を持つ女は不幸だ。18 このことが冬に起こらないように、祈りなさい。19 それらの日には、神が天地を造られた創造の初めから今までなく、今後もし決していないほどの苦難が来るからである。20 主がその期間を縮めてくださらなければ、

だれ一人救われない。しかし、主は御自分のものとして選んだ人たちのために、その期間を縮めてくださったのである。21 そのとき、『見よ、ここにメシアがいる』『見よ、あそこだ』と言う者がいても、信じてはならない。22 偽メシアや偽預言者が現れて、しるしや不思議な業を行い、できれば、選ばれた人たちを惑わそうとするからである。23 だから、あなたがたは気をつけていなさい。一切の事を前もって言うておく。」

### ①構成

#### ㉑ 小黙示録

マルコ13章には、イエスが弟子に語った教えがまとめられており、「小黙示録」と呼ばれる。イエスが死を目前にして語っている点では「遺訓」であるが、再臨を視野に入れて終末について語られている点が特徴である。受難物語の前にこの「遺訓」を置くことによって、マルコは受難のイエスこそが、終末の時に再臨する栄光の人の子であることを明示する。

#### ㉒ 神殿崩壊の時と終末のしるし

㉗ ヘロデ大王はエルサレム神殿の修築を行った。工事は紀元前19年から始まり、前9年に大方は終了したが、最終的には紀元64年まで続いた。弟子の一人は「なんとすばらしい石、なんとすばらしい建物でしょう」と感嘆したが、この壮麗な神殿の崩壊をイエスは告げる(1—2節)。弟子たちは神殿崩壊の時と終末のしるしについてイエスに問いかける(4節)。

① 黙示文学では戦争や地震、飢饉は終末に「起こるに決まっている」苦難であり(7節。ダニエル29、黙1—1)、家族間の対立も終末の時に現れるとされている。イエスは黙示文学の言葉を用いて、まず神殿崩壊について語るが(5—23節)、その中で最大の苦難は「荒廃の憎むべきもの」(14節)の出現である。しかし、それらの苦難は「産みの苦しみの始まり」であり、「まだ世の終わりではない」(7—8節)。「このような苦難の後に」、栄光の人の子が来臨する。その時こそが終わりの時である。

(1) 惑わす者、戦争のうわさ、敵対関係、地震や飢饉など、産みの苦しみの始まり(5—8節)

(2) 迫害と証し、福音の宣教(9—13節)

(3) 最大の苦難の到来(14—20節)

(4) 偽メシアと偽預言者に注意するようにとの警告(21—23節)

(5) 終末のしるし—人の子の来臨(24—27節)

(6) 終末に備えるようにとの教え(28—36節)

### ②最大の苦難(14—20節)

#### ㉑ 「荒廃の憎むべきもの」

㉗ 「憎むべきもの」は中性名詞。「嫌悪すべきもの・忌まわしいもの」を意味し、七十人訳での用法に従って、偶像礼拝と関係のある事物に用いられる。「立っている」は完了分詞の男性形。

この分詞が男性形であることから、「荒廃の憎むべきもの」は「反キリスト」を表すという暗示的な解釈が行われている(2テサニ3—10)。終わりの時には、神に敵対する反逆が起こり、「反キリスト」は神とキリストにとって代わる。しかし、マルコでは終わりの時は「荒廃の憎

むべきもの」の出現後にやって来るとされておられ、「反キリスト」の出現は未来のことになる。

④「荒廃の憎むべきもの」という表現は、ダニエル12章11節(七十人訳)では、紀元前168年にシリア王安ティオコス四世エピファネスが行った神殿の冒瀆を表す。エピファネスはエルサレム神殿の祭壇を取り除いて、異教の祭壇を作った(ダニエル27、1マカ154・59、六7)。歴史的背景を踏まえると、このダニエル書の引用は、紀元66―70年の第一次ユダヤ戦争において行われたローマ軍によるエルサレム神殿の冒瀆を示している。従って、「立つてはならないところ」とは神殿であるだろう。マタイ福音書はこれを「聖なる場所」(二四15)に変え、神殿を表していることを明確にしている。ローマ軍の総司令官ティトスは、崩壊した神殿跡にローマの神をまつる神殿を建てている。

⑤紀元68―69年、ローマ軍がエルサレムを包囲した際、ユダヤ軍の中では熱心党の部隊と他の部隊が対立し、いたるところで殺人を犯した。「荒廃の憎むべきもの」は神殿で犯されたこれらの犯罪を表しているという解釈もある。

⑥「取り上げるために降りて入るな」「取り上げるために戻るな」

屋根の上にいる者は、「何かを取り上げるために、降りて家の中に入る」ことを禁じられる。また、畑にいる者は「上着を取り上げるために、戻る」ことを禁じられる。「取り上げるために…するな」という禁止命令が繰り返されて、危険を避けて山々へ逃げるために、一刻の猶予もないことが示されている。身重の女性や授乳する女性が「不幸だ」とされるのも、危険が差し迫っていることを強調するためである。また「冬」という季節は雨期であり、乾期よりも避難が困難になる。乾期には水のない谷となるワディは、雨期には激しく水が流れる谷川となる。

⑦不幸だ(ウーアイ)

⑧苦痛や悲嘆を表す感嘆詞として「悲しいかな・ああ哀れだ」を意味する。イエスは、数多くの奇跡を見ても悔い改めなかった町コラジンやベトサイダを「不幸だ」と言って叱った(マタ121)。また、イエスは律法学者たちとファリサイ派の人々を「あなたたち偽善者は不幸だ」と非難する(マタ二三13以下、ルカ1142以下)。このほか、イエスが「不幸だ」と言って嘆いたのは、人の子を裏切る者であり(マコ1421)、人をつまづかせる者であり(マタ187)、いま満腹していたり、笑ったりしている人である(ルカ六25)。

⑨パウロが福音を告げ知らせるときはいつも、彼は神の熱意による必然によって動かされている。だから、福音を告げ知らせないということは、いまのパウロにはありえないことだが、もし将来福音を告げ知らせないことがあるとしたら、パウロは「不幸」である。なぜなら、それはすべての人を救おうとする神の熱意に応えないことになるからである(1コリ九16)。

⑩「起こらなかった、また決して起こらない」

創造の初めから起こらなかった苦難であるだけでなく、それは今後も「決して起こらない」。7節に「戦争の騒ぎや戦争のうわさを聞いても、慌ててはいけない。そういうことは起こるに決まっているが、まだ世の終わりではない」とあるように、終わりの時までにはまだ時間がある。

⑪苦難(スリープシス)

⑫動詞スリポー(圧迫する)の名詞形。陣痛の苦しみ(ヨハ1621)、飢饉の苦しみ(使七11)、結婚生活の苦勞(1コリ七28)、やもめの苦勞(ヤコ127)など広く「苦境・苦しい試練」を表すが、聖書のメッセージと密接な関係を持つ用例も多く見られる。

①キリスト者が受ける「(迫害の) 苦しみ」を表す。キリスト者にとって「苦難」は定めであり(1テサ三3以下)、宣教師パウロも(2コリ一8)、宣教を受け入れた教会も「苦難」にさらされる(フィリ四14)。しかし、この苦難はキリストの「苦しみ」にあずかり、復活の命に入るための道である(2コリ一8-10、フィリ三10-11)。

⑦終末時に世界全体を襲う大きな「苦難」を表す。この苦難は具体的には戦乱・地震・飢饉・迫害・偽メシアの誘惑という形をとるが、マルコではこれらは終末の出来事ではなく、「産みの苦しみの始まり」(マコ一三8)とされている。この苦しみの後に、終わりの時が到来し、人の子が救いをもたらす(マコ一三26-29節)。だから、目を覚まして待ち受けるようにと求められている(マコ一三33)。

①「主は日々を縮めた」

主は「苦難の日々を」縮めた。アオリスト形が用いられており、苦難の日々がすでに終わったことを示している。マルコにとってエルサレム神殿が崩壊したユダヤ戦争は過去の出来事であり、それを予告の形で語っている。

③あなたがたは見なさい(21-23節)

①「あなたがたは見なさい」

5-6節と21-23節前半は内容的に対応している。イエスは弟子たちの質問に答えて、「わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『わたしがそれだ』と言って、多くの人を惑わす」から、「気をつけなさい(あなたがたは見なさい)」と話し始める。そして、神殿崩壊という苦難を語る言葉の最後にも、イエスは偽メシアや偽預言者の出現を語り、「あなたがたは見なさい」と命じる。彼らは選ばれた者たちを惑わすために奇跡を行う者たちだからである、惑わす者たちはユダヤ戦争の苦難を終わりの時と見なし、メシアが到来したと語る。しかし、マルコはメシアの到来はこれらの苦難の後に起こると教えている。

②「選ばれた者たち」

「選ばれた者たち」は20・27節にも用いられている。20節では「主が選んだところの選ばれた者たち」とあり、「選んだ」は「自分のために引き抜いた・選び出した」を意味する。マルコでは教会の信徒を表している。

④救いは人の子によってもたらされる

①マルコは黙示文学の用語を用いて13章を書いているが、戦争や対立、自然災害、迫害(9-13節)、さらにエルサレム陥落と神殿の冒瀆(14-20節)は、終わりの時のしるしではないと述べる。こうして、終わりの時のしるしである「栄光を帯びた人の子の到来」へと目を向けさせる。

②マルコ13章24-25節には、「太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は空から落ち、天体は揺り動かされる」とある。黙示思想の影響によって当時のユダヤ人たちは、天変地異は世を裁く人の子の到来の前兆、すなわち神の最終的な裁きの開始を告げる「しるし」だと考えており、人々は天変地異と結びついた神の裁きを恐れていた。しかし、「人の子の到来」は「選ばれた人たちを四方から呼び集め」、救いをもたらす。キリスト者が待ち望む救いは、神殿とは切り離された救いである。それを明らかにし、人の子の到来にすべての希望をかけるようにと呼びかけている。